

研究ノート

クララ・ツェトキーンとローザ・ルクセンブルク

——ローザ・ルクセンブルク没後90年に寄せて——

伊藤 セツ

Clara Zetkin and Rosa Luxemburg:
In Memoriam Ninety Years after Luxemburg's Murder

Setsu Ito

はじめに

2008年はクララ・ツェトキーン (Zetkin, Clara 1857.7.5-1933.6.20, 以下引用の場合は引用者の表記で、それ以外は、単にクララと記す場合がある) の没後75年であったが、2009年はローザ・ルクセンブルク (Luxemburg, Rosa 1871¹.3.5-1919.1.15, 以下単にローザと記す) の没後(というより虐殺)90年にあたる。クララはドイツ人であり、ローザはポーランド人で、クララより14歳若かった。ローザは、1898年にドイツに移住してベルリンに住んでから1919年の死に至るまで、シュツットガルトを拠点として活動していたクララと20年間、個人的にも政治的にも親しい間柄であった。

それは、SPDにおいて政治的・思想的にお互い近い立場にあったばかりでなく、ローザがクララの次男コンスタンチン (Zetkin, Konstantin 1885.4.15-1980.4.5, 以下コスチャと記す) を愛したことで、クララとローザの関係は特別であったといえる。このことは、ローザからコスチャにあてた手紙によって確認されるが、クララがローザとの関係で残した文書に、前者を匂わせるものは発見されない。

また、これまでクララとローザの関係は、ロシア革命をめぐる両者の見解の相違に関する件²を除き、そのもの自体として扱った論者もない。ローザがクララとコスチャへ送った手紙は膨大なものである(後述)にもかかわらず、日本ではその文通に着目して邦訳したものもない³。クララとローザとの関係に言及される場合も、クララは

1 1870年生まれ説もある。

2 この関係を正面から扱った論文に Heinicke (2008) がある。また、後述するがクララは、ローザのロシア革命批判を批判しているがそれは事実誤認であると評されている (伊藤成彦 1985: 212-216)。

3 ローザの手紙の邦訳は多い (カールおよびルイーゼ・カウツキー宛は川口・松井訳 1932, ソフィー・リープクネヒト宛は北郷訳 1952, レオ・ヨギヘス宛は伊藤成彦訳 1976, その他数名へあてた手紙は、伊藤成彦訳 1991) が、コスチャやクララ宛のものは邦訳されていない。

女性問題にだけ目を向けて、ローザにとってそれほど重要ではない人物という印象を与える叙述も見られる(寺崎 1994: 30-31)。

しかし、ローザの伝記を書いたパウル・フレリヒ (Frolich, Paul 1884.8.7-1953.1) は、『ローザ・ルクセンブルク』の第3版へのまえがき (1948年秋 ii) のなかで、ローザとクララとの関係を象徴する次のような一文を残している。

ローザ・ルクセンブルクの生涯と思想を生き生きと再現するのに最適の人は、クララ・ツェトキンであった。一中略一、育ってきた環境は異なっていたが、互に相手の体験から影響を受け合い、思想的な見方と政治行動において一致した見解と態度をとるにいたった。ローザの後に生き残った社会主義運動の指導者のなかでクララ・ツェトキンほどに、人間として、また闘士としてのルクセンブルクを、彼女の闘った舞台を、その歴史的状況や闘いに際しての味方と敵を、知っているものは他にはいない。彼女は、資料からのみ判断するものには窺いしることのできないような、ローザ・ルクセンブルクの態度決定に際しての特殊な動機を知っていたのである。クララ・ツェトキンがローザの伝記を書いたならば、どのようなものを書いたかは、彼女がこの僚友を追憶して書いた論文やパンフレットに示唆されている。しかし、クララ・ツェトキンは、1933年に死ぬまで日常闘争に身を献げ、これが付れた僚友が自分に課した義務に答える道だ、とくりかえし語ったのであった (フレリヒ1948=伊藤成彦訳1991: ii)。

なお、フレリヒは、クララの次男コスタとほぼ同年齢であり、1927年、クララ70歳を記念する小冊子に、クララの小伝も書いており (Frolich 1927:3-17)、自ら複雑な政治的立場に置かれながらも同時代人としてローザやクララと直接関わり、両者を熟知していた人物である。

また、クララの伝記作家、旧東独 (DDR) のルーゼ・ドルネマンは、「二人の偉大な女性革命家の友情は、ドイツ労働運動史上もっとも美しく価値あるものの一つである」 (Dornemann 1957=武井 1969:133) ともいっている。

さらに、クララとローザの関係をみると、私は、ローザと同じ日に惨殺されたカール・リープクネヒト (Liebknecht, Karl 1871.8.13-1919.1.15) とローザと二人の、生誕100年を記念してDDRで1971年に編まれた34名による追悼文集 *Karl und Rosa, Erinnerungen* の冒頭が、二人に捧げるクララの詩⁴で始まること、加えてその邦訳『カールとローザ、ドイツ革命の断章』があえてクララ・ツェトキン他著とされている点にも注目したい (IML 1971=栗原訳 1975)。

実際、クララとローザの関係は、クララが、二番目の夫、画家のフリードリヒ・ツンデル (Zundel, Friedrich 1875.10.13-1948.6.7) と居を構えたシュツットガルトのジレンプー

4 かれらのありし日のすがた、/ かれらがその存在と/活動とによって世にあたえたもの、/ それは不滅である。/ それは 無数のプロレタリアのなかに/ 深く入り込んでいて/ 知識となり/ 意志となり 行為となる。クララ・ツェトキン (栗原佑訳)。

フでの家族的交友、前述次男コスタとベルリンでの特別な関係等、私的・家族的なものから、ロシア革命、ドイツ革命等の同時代に遭遇した世界史的出来事をめぐる理論と運動そのものに及ぶ。

クララの女性解放論を追っていた私は、これまでクララとローザとの関係に立ち入らなかった。その理由は、中心問題が、私がテーマとしてきた「女性解放論」の範疇を超えて、ソ連・東欧社会主義の崩壊後に特に注目をあびたローザの「ロシア革命論」と、ローザを死に至らしめた「ドイツ革命」やKPDをめぐる問題であったので、実際のところ、私の守備範囲を超えていたからである。

しかし、2009年1月15日は、まぎれもなくローザの虐殺90年なのである⁵。その事実からも、また、クララ研究は、「女性解放論」に限定しては完結しないとの自戒の意味からも、私が入手しえている文献をもとに、あえてローザとクララの関係を取りあげ、私のクララ研究にひきつけて新しい発見を記したいと思う⁶。



ベルリン近郊ビルケンペーダーのクララ・ツェトキンの家の庭のクララとローザ像 (2007.7.7 伊藤セツ撮影)

1. クララとローザの関係とは何か

ローザとクララの関係の概略を表に示す⁷。

-
- 5 2009年1月19日にベルリンでローザの国際会議があり、そこで「クララとローザとの関係」の報告の打診が筆者に、ローザの研究者伊藤成彦氏からきた。準備の時間がないと判断して辞退したが、本稿には何らかの形でこの日に参加したいという意味も込められている。
- 6 今回は、関連日本語文献、邦訳文献、ドイツ語文献について、私が入手している範囲内でも、すべてに目を行き届かせることは不可能であった。
- 7 この二人をめぐる関係には不可欠と思われる、コスタ・ツェトキン、パウル・レヴィに関する事項も表中に入れた。

表 クララとローザの関係を示す略年表

| | |
|------------|--|
| 1857.7.5 | クララ：ドイツ、ヴィーデラウに生まれる。 |
| 1871.3.5 | ローザ：ロシア領ポーランド、ザモシチに生まれる。 |
| 1889 | 1.30 クララ：オシップ・ツェトキーンとパリで死別。7.14-20 第2インターの創立。 ローザ：チューリヒへ、チューリヒ大学で自然科学、数学、政治学、経済学を学ぶ。 |
| 1890 | ローザ：レオ・ヨギヒェスと知り合う。 |
| 1891 | クララ：12.28 『グライヒハイト』の編集引き受け見本号発行（シュツットガルト）。 |
| 1897 | ローザ：「ポーランドの産業的發展」により学位取得。グスタフ・リューベックと形式上の結婚でドイツ国籍を得る（結婚は1903年に解消）。 |
| 1898 | 5月 ローザ：スイスからドイツへ移住。SPDの黨員となる。5.17付けレオ・ヨギヒェスの手紙にクララの名がはじめて現れる。10.3-9 クララとローザ SPD シュツットガルト大会で会いベルンシュタインに反対。 |
| 1899 | ローザ：6.18 フリードリヒ・ツンデルへの手紙で、彼のアトリエに行ってクララと二人の元気な若者に会ったこと、10.9-4のハノーファーの SPD 大会で会いたいと書いている。クララ：11月 画家フリードリヒ・ゲオルグ・ツンデルと再婚。 |
| 1900 | ローザのクララへの多分現存するはじめての手紙（日付不明）。 |
| 1903 | 10月 クララ：シュツットガルト郊外ジレンプーフに転居。 |
| 1904.1.16 | ローザ：ツヴィッカウ地方裁判所から「不敬罪」で禁固3ヶ月の判決をうける。 |
| 1905.12.18 | ローザ：非合法にワルシャワへ。 |
| 1906 | ローザ：3月ワルシャワで逮捕される。7月までワルシャワ要塞第10監獄に収監されるが釈放され、フィンランド経由でベルリンへ帰着。ヴァイマル地方裁判所から禁固2ヶ月の判決。 |
| 1907 | 1.15 ローザのコスチャへの現存するはじめての手紙。6-7月 ベルリン婦人監獄『国民経済学入門』を書く。8月 SPD 党学校の経済学講師。第2インターシュツットガルト大会でクララ、ローザ、レーニン同席。 |
| 1910 | SPD マクデブルク党大会。 |
| 1913 | ローザ『資本蓄積論』を書く。 |
| 1914 | 3.4 クララ：「同志ルクセンブルクは有罪判決を下された」『グライヒハイト』6月第一次世界大戦起る。院内反戦活動を支えたローザ、フランツ・メーリング、クララ、開戦の夜に会合して激を送る。8.4 SPD 議員団軍事公債承認。第2インターの崩壊。9.10 カール・リープクネヒト、ローザ：フランツ・メーリング、クララ SPD の戦争政策に反対声明。ローザ：フランクフルト（マイン）地方裁判所から禁固1年の判決。1914年末、12.3の第二次戦時公債法案カール・リープクネヒトが反対。 |
| 1915 | 1.15 ローザからコスチャへの現存する最後の手紙。2.18 ローザ：逮捕される。1年の禁固刑。ベルリンパルニム街の女子刑務所へ。3月 ベルンで国際社会主義女性会議開催。3月 国家予算の採択でオットー・リューレが反対。4月 ローザ：獄中で『社会民主主義の危機（ユニウス・プロシューレ）』書く。4.15 ローザとフランツ・メーリングの編集による『ディ・インターナショナル』が発刊。1号で発売禁止（ローザの他クララ、ケーテ・ドゥンカーも執筆）。検察当局はメーリング、ルクセンブルク、ツェトキーン、発行者、印刷者を大逆罪をもって告発。1915年12月戦時公債法案2人反対。中央派も戦時公債法に反対。 |
| 1916 | 1.1 リープクネヒトの事務所での全国活動家会議。ローザの起草による「国際社会主義の任務に関する方針」、スパルタクスグループ結成。クララは病気。ローザは獄中で不参加。2.18 ローザの出獄。7.10 ローザ：ベルリン女子刑務所、ヴロンケ要塞（ポーランド）に収監。 |

| | |
|------|--|
| 1917 | <p>ローザ：獄中。1.7 USPD 創立準備会。3.12 ロシア2月革命。5.7 レーニン：チューリヒからロシアへ帰国。クララー：4月に創立された USPD の統制委員となる。5.16 1891年以来編集長を務めた『グライヒハイト』を追われ、『ライプツィヒ人民新聞』に依拠し、6月29日にその『女性付録』第一号を発行。7.22 ローザ：ブレスラウ刑務所に「保護拘禁」。8月 ローザ：獄中から「焦眉の時局問題」『スパルタクス』に発表。11.7 ロシア10月革命の始まり。11.30 クララー：「ロシアにおける権力と平和の戦い」『ライプツィヒ人民新聞女性付録』に発表。</p> |
| 1918 | <p>1.28 ドイツ大衆ストライキ、労働者評議会（レーテ）成立。主勢力はベルリン金属労働組合の職場活動家集団（オプロイテ）。3.3 プレスト・リトウスクで露独単独講和。初夏 クララー：「ボルシェヴィキの仕事に断固たる態度を」（USPD の国家委員会と女性代表者会議への手紙）。ローザ：獄中で「ロシア革命論」を書く（パウル・レヴィ公表は時を得ない情勢と判断）。</p> <p>10.3 ドイツ、連合軍に休戦申し入れ。11.3 連合軍、ドイツの休戦申し入れ承認。11.4 「挙国一致内閣」成立。兵士評議会、キール軍港で水平暴動。労働者・兵士レーテ成立。ドイツ革命の始まり。各地で労働者・兵士レーテ成立。11.7 バイエルン王退位、共和国宣言。</p> <p>11.8 ローザ：ブレスラウ監獄から解放。11.10 ベルリン着。</p> <p>11.11 休戦調印、同日 スパルタクスグループはスパルタクスブントとなる。クララー病気で不参加。11.13 クララー：「ロシアプロレタリア革命の1年」『ライプツィヒ人民新聞女性付録』に発表。11.22 クララー：「革命と女性」『ローテ・ファーネ』。11.25 スパルタクスブント「万国のプロレタリアへ」。12.2 クララー：「完全な民主主義の輝きと存在のために」『ライプツィヒ人民新聞女性付録』に発表。12.14 ローザ：「スパルタクス同盟は何を欲するか」。12.16 ベルリンで開かれた労兵評議会はソヴィエト制を採して立憲民主共和国制とする意見を支持。12.30 KPD 結成。</p> |
| 1919 | <p>1.6 ゼネスト、エーベルト政府に軍と義勇軍結集。1.8-12 武力攻撃・戦闘、反革命軍占領、KPD を対象とした迫害。1.11 ローザのクララーへの最後の手紙。</p> <p>1.15 夜9時頃ローザとカール・リープクネヒト、バルリン-ヴィルメルスドルフ、マンハイム街53番地最後の隠れ家で逮捕。ローザ：エデンホテルで反革命軍兵士ルンゲ、フォエゲル中尉の手で虐殺され、遺体はティーア・ガルテンまで運ばれ、リヒテンシュタイン橋から、運河に投げ込まれる。</p> <p>パウル・レヴィ指導者となる。1.19 国民議会選挙。KPD ボイコット、USPD22, SPD 163, 民主党75, 中央党91当選。1.10-2.4 ブレーメン・レーテ市の権力掌握、敗北。</p> <p>1.25 カール・リープクネヒトの埋葬。2.6-13 国民議会をヴァイマルに召集。エーベルト臨時大統領。3.2-6 モスクワでKI 創立大会。3.10 レオ・ヨギヒェス、殺害される。</p> <p>5.31 ローザの遺体運河で発見。6.13 ベルリンのフリードリクスフェルデに埋葬。ローザ『社会民主党の危機（ユニウス・プロシューレ）』1919年版にクララー序文書く。</p> |
| 1920 | <p>クララー：「1919年の革命闘争と革命的戦士」等ローザに関連する論文発表。3.13-4 上旬カップ暴動と収拾。6.6 国会選挙。クララーとパウル・レヴィ KPD から国会議員に当選。10-11月 クララー：ソヴィエト・ロシアを訪問。12.4-7 USPD 左派とKPD の統一。</p> |
| 1921 | <p>2.22-24 KPD 中央委員会でクララー、パウル・レヴィら中央委員会から脱退。3.16-4.1 中部ドイツで3月行動、ゼネスト不発。クララー3月行動批判。4.11 パウル・レヴィ「われわれの道。一揆期主義に抗して」公刊。4.15 パウル・レヴィ除名される。6.22-7.12 クララー：KI 第3回大会に参加のためモスクワ滞在。レーニンと会う。パウル・レヴィ：ローザの『ロシア革命論』出版決意（11.14付序文）。</p> <p>クララー：アドルフ・ワルスキーと連名で「説明（パウル・レヴィの背信に対して）」を『ローテ・ファーネ』12.22付けに掲載。</p> |

| | |
|------|---|
| 1922 | パウル・レヴィ：ローザの『ロシア革命論』をKPD, KI 指導部と対立して公表。クララ：「ロシア革命に対するローザ・ルクセンブルクの立場について」を書く。11.5-12.5 クララ：KI 第4回大会に参加。 |
| 1930 | 2.9 パウル・レヴィ自殺。 |
| 1933 | 6.20 クララ：モスクワ近郊アルハンゲルスコエで病死。 |
| 1980 | 4.5 コスチャ・ツェトキン：カナダで病死。 |

注：ローゼンベルク（1928＝足利訳 1969）、フレイトハイム（1948＝足利訳 1971）、野村編（1972）IML/ZK/SED hrsg.（1971＝栗原佑訳 1975）、Hetmann（1976）、伊藤成彦（1985）、Institute für Geschichte der Arbeiterbewegung（1990）、篠塚（2008）等を参照して筆者作成。

繰り返すが、ローザとクララの関係とは、この表に見られるように、クララ一家、特にクララの次男コスチャとの関係、SPD 左派から KPD に至る政治的・思想的過程での関係、ローザの遺作「ロシア革命論」の公表とその内容をめぐる関係である。

2. 私的生活でのクララとローザの関係

ローザが愛した男性は、ポーランド人のレオ・ヨギヘス（Jogiches, Leo 1867.7.17-1919.3.10 殺害）のほか、クララの次男コスチャ・ツェトキン（1885.4.15-1980.4.5 病死）、ローザの弁護士だったパウル・レヴィ（Levi, Paul 1883.3.11-1930.2.9 自殺）といわれている（伊藤成彦 1991: 13）。

パウル・フレリーヒによると、レオ・ヨギヘスについて、クララは次のように評しているとのことである。私はクララのこの言葉の出所を確認していない。

二人（ローザ・ルクセンブルクとレオ・ヨギヘス）ともっとも親しかったクララ・ツェトキンは、レオ・ヨギヘスは、ローザ・ルクセンブルクの行動や著作の仮借ない批判者であって、彼女の理論的知識や実践的知識を批判した。かれは遠くを見通して鼓舞する人であったが、ローザは、物事を鋭く見て包括的に理解する人であったと証言している。クララ・ツェトキンがヨギヘスについて、「かれは自分の傍に偉大な女性がいることに耐えることができ、そしてその女性が成長し発展することを自分の自我の桎梏と感ぜずに、真のゆたかな友情を交し合うことのできる、今日ではひじょうに稀な男性の一人であった」。この友情はお互いの感情が消えてしまった後の時代になっても、少しもそこなわれることなく続いたというのである（フレリーヒ 1948＝伊藤成彦訳 1991: 20-21）。

非政治的にローザの心をとらえているのがコスチャ・ツェトキンである。西川正雄は、コスチャを、ローザの「15歳年下の恋人」（西川 1989: 126）、「一時期の恋人」（西川 1989: 216）と表現しているが必ずしも一時期とはいえない。また、伊藤成彦（1991）『ローザ・ルクセンブルクの世界』の扉には、張りのある顔をしたローザの横で俯き加減に立っているコスチャの写真が、また同じく、ローザ・ルクセンブルクの手紙集『友への手紙』（ルクセンブルク、伊藤成彦訳 1991）の95ページには、ローザが描いたコスチャの肖像をローザと二人でもつコスチャの写真が掲載されている（いずれも出典の明記なし）。

マルガレーテ・フォン・トロッタ監督の映画『ローザ・ルクセンブルク』（1985）にも描か

れるコスチャは、数奇な運命をたどった人である⁸。彼は、1885年にパリで、オシップ・ツェトキーン (Zetkin, Ossip 1850-1889.1.30) とクラアラの間に生まれたが、3歳で、父オシップと死別した。ドルネマン (Dornemann, Luise) の伝記には、コスチャのことを「ベルリンで勉強し、下宿先のローザ・ルクセンブルクから母親のように世話をしてもらった。彼も医者になったが、2〜3年は一おそらくローザ・ルクセンブルクの影響で一国民経済を研究するために勉学を中断している」(ドルネマン 1957=武井邦訳 1969: 130) と書かれている。

コスチャは、シュツットガルトで母クラアラが1897年に親しくなり、1899年に結婚したクラアラの二人目の夫、画家、フリードリヒ・ツンデル (Zundel, Friedlich Georg 1875.10.13-1948.6.7) と、10歳代のはじめから兄マクシムとともに暮らした。ツンデルは1897年に12歳のコスチャを、また、1900年にはバイオリンを持った15歳のコスチャを描き (チュービンゲン、クンストハレ所蔵)、現在もベルリン近郊のビルケンヴェーダーの「クラアラ・ツェトキーン-ハウス」(16547 Birkenweder Summter Stsasse 4) に展示されているクラアラの肖像も残している。

シュツットガルトでは、コスチャは、兄マクシム (Zetkin, Maxim 1883.8.1-1965.8.19) とシュツットガルトの私立のギムナジウムで中等教育を受け (Puschnerat 2003: 80)、そのあとマクシムはミュンヘンで医学を学んで外科医となった (Badia 1993=Hervé und Ingebourg 1994: 117) が、コスチャは、1904年から1905年に医学生としてベルリンに行くと推測される。

コスチャとローザとの直接の手紙のやり取りは、1907年1月から1915年4月10日までの8年間、コスチャ22歳から30歳まで、ローザ37歳〜45歳までに及ぶ。1907年、ローザは、政治経済の研究を彼に勧めて、その上、彼にSPDの党学校の講師を紹介しようとしたが、成功しなかった。コスチャは、それからシュツットガルトに帰り、母、クラアラの『平等』の編集を助けた (Badia 1993=Hervé und Ingebourg 1994: 117)。

『ローザの手紙全集』(Luxemburg 1982-84) には、1907年1月付けの「コスティーク、私の息子!」ではじまる最初の手紙から、「ニウニウ (Niuniu)、私のお気に入り (Liebling)、誕生日までにこの手紙をまちがいなく受け取ってくれるといいんですが」で始まる1915年4月10日付けの手紙まで8年間で550通ほどのローザからのコスチャ宛の手紙が残されている⁹。ローザとコスチャとの関係がどのようなものであったかは、ローザの手紙全集が

8 コスチャの簡単な生涯のスケッチは、伊藤 (2007b) 参照。

9 ローザからコスチャへの手紙は、ローザの『手紙全集』によれば、1907年に27通、1908年に77通 (以上第2巻)、1909年に45通、1910年に111通 (以上第3巻)、1911年に127通、1912年に111通、1913年に1通、1914年に1通、付録で9通 (以上第4巻)、1914年に15通、1915年に13通 (以上第5巻) 確認される。ローザの手紙の邦訳は多い (カールおよびルイーゼ・カウツキー宛ては川口・松井訳 1932、レオ・ヨギヘス宛ては、伊藤成彦訳 1976、その他数名へあてた手紙は、伊藤成彦訳 1991) が、コスチャ宛のものは邦訳されていない。尤も、クラアラ・ツェトキーン宛てのものも多く、その中でコスチャや兄マクシムへの言及も多いがこれも邦訳はない。

発行されるまで私にはわからなかった。1915年で途絶えるのは、コスチャの第一次世界大戦への従軍のためである¹⁰。

ローザからコスチャへの手紙によって、第一次世界大戦に対する、コスチャの態度の一端が読み取れる。1914年8月1日、コスチャに、ベルリンに（ブリュッセルから）戻ったと電報を打ち、翌日8月2日、「ニウニウシュ（Niunisch）、2通の手紙受け取りました。私はあなたといっしょに、あなたのそばにいて、いろんなことを語り合い相談できたらどんなにいいかと思います。」（中略）。「全世界は、突然、精神病院になりました。あなたの『党から抜ける』については、笑っちゃいました。あなたは、おおきな子どもなの？あなたはひょっとして、人間から『抜ける』つもりですか？」（Luxemburg V, 1984: 7）¹¹。

コスチャは、1915年3月に召集され、6月に衛生兵としての教育を終え、当面衛生兵連隊に入った（Luxemburg V, 1984: 66）。1918年の9月まで、クララをはじめ、ルイーゼ・カウツキーへの手紙の中にコスチャとマクシムの安否を気遣う表現が何度も現れる¹²。例えばブレスラウから、1918年9月6日付けクララ宛てに、ローザは、「最愛のクララ、あなたのカードありがとう。私はあなたがとても心配しているだろうと思います。コスチャがもうあなたの保護のもとにあり、マクシムからよい知らせが届いているといいのですが、ともかく時間が許すなら、一行でも書いてよこしてください。それをみると、私は心が休まるでしょう。私のほうは、ヤーコブ嬢¹³がここに来て、3週間の予定でこの近くのグラツェア連山に出かけたこと以外、新しいことは何もありません。帰路またここに寄るでしょう。私はあなたからの一言を待ち焦がれています。あなたを何度も抱きしめます。あなたのR。」（Luxemburg V, 1984: 407）。

1918年11月11日、ドイツは休戦協定に調印し第一次世界大戦は終結し、クララの二人の息子は無事ドイツに帰還した。その後、2ヶ月余り、丁度ローザの死の前後のコスチャの動向を把握する資料を私は発見していない。コスチャはその後、SAPMOに収集されている手紙で見ると、1925年には亡命ロシア人ナジャ・マッソヴァ（Massov, Nadja）とシュツットガルトで生活していた¹⁴。

10 1914年11月1日付け、ローザのハンス・ディーフェンバッハ宛て手紙に、Costia ist noch zu Hause und arbeitet in der Redaktion. という一文がある。Zu Hause は、伊藤成彦によっては、「家で」（伊藤 1991: 95）、カウツキー編（1924=川口・松井訳 1983: 261）によっては「銃後であって」と訳されている。

11 この部分は西川（1989: 215-216）によっても引用されている。

12 映画『ローザ・ルクセンブルク』（1985）では、ローザが1917年、ブレスラウ監獄に移されて後のある日、コスチャの訃報が届くというストーリーになっているがこれは全くのフィクションであることがわかる。1917年に戦死したのは、ローザが、ハンスネレ、ヘンシェンと多くの手紙で呼びかけたハンス・ディーフェンバッハ（Diefenbach, Hans 1884-1917.10.24）であろう。彼はコスチャと年齢が近い医師であり、『ノイエ・ツァイト』に執筆していた。

13 Jacob, Mathilde（1873-1943）は、当時、ベルリンでタイプと複写事務所を管理。ローザの秘書。社会民主党のために仕事をしていた。

14 プッヒェルナートは、Costia und dessen Lebensgefährtin Nadja von Massov（Puschnerat 2003: 373）という書き表し方をしている。

コスチャは、クララが、ツンデルと正式に離婚した後、1929年にシュットガルトを離れ、ベルリン近郊ビルケンヴェーダーにクララのための家を購入した。コスチャとナジャは、二人でそこに住んで、ベルリン滞在時のクララを助けた。これが、現在の「クララ・ツェトキーンハウス」である (Dornenburg 1997: 46)。1930年代のコスチャの手紙がSAPMOに残されているが、1932年2月6日モスクワ、ホテル・メトロポール205号室から出された、クララの長男マクシムの前妻の子ヴォルフガンク10歳の誕生日を祝うクララからの手紙には、「CとN、そしてあなたのお父さんは、みんな、あなたに誕生日のお祝いをおくります」とあり、コスチャとナジャも名を連ねている (SAPMO-BArch NY4005/63, Bl.124) ので、この時はモスクワにいたのではないと思われる。

1933年、クララの没後、コスチャは、ドイツからも、ロシアからも、マクシムの前からも消える¹⁵。しかし、コスチャは1933年以降どのようなルートか不明であるが、北米に亡命して生き延びていたのである。1972年と1973年に、USAのクララ・ツェトキーン研究者、カーリン・ハニーカットのインタビューをうけたとき、コスチャには、ゲルトルートという妻がいた (Honeycut 1975)。コスチャは、1980年4月6日に95歳を前にして (4月14日が誕生日) カナダで没した。彼は、ローザの虐殺のあと60年以上も生きて、第二次世界大戦後も兄マクシムとも連絡を取らず、兄の居る東ドイツ、東側に分割されたビルケンヴェーダーに帰ることもなかった。

3. 第一次世界大戦、ロシア革命、ドイツ革命におけるローザとクララ

(1) 第一次世界大戦

1914年、第一次世界大戦が起きて、各国社会民主主義者はこれに賛成し、第二インターナショナルは崩壊した。その後、表中に示す出来事が相次いで起こる。1915年3月には、ベルンで社会主義女性会議が組織された (詳細は、伊藤セツ 1984: 332-338, Müller 2008: 54-71)。1915年ころからローザは殆ど獄中にあり、クララも短期の拘束の後、病気でシュットガルトにこもり、二人ともそれぞれの場で文筆活動を続けている。ローザは、1915年獄中で『社会民主主義の危機』をユニウスというペンネームで書いた。それは「ユニウス・プロシュレー」と呼ばれている。

クララ・ツェトキーンは後にローザの『ユニウス・プロシュレー』の新版 (1919) に序文を書いた。それはドイツでの反戦闘争を伝えるものであった。

「闘争は社会民主党の軍事予算承認に抗議をもってはじめられることになったが、この抗議は、戒厳令と検閲のあみにかからないように巧みに行なわれなければならなかった。しかも、もし当初から、少なからざる数の著名な社会民主黨員がこの抗議を支持するならば、それが大きな

15 コスチャは、スペイン内乱 (1936-39) に従軍して死んだとさえいわれた時期もある (1983年ビルケンヴェーダーのクララ・ツェトキーンの家博物館での説明。これが事実でないことは、当時のクララ・ツェトキーン教育大学のフリッツ・シュタウデ教授も認めていた)。

意味をもつことは明らかであったので、われわれは国会の中や私的な集まりで、8月4日の党の政策に鋭い、破壊的なまでの批判を浴びせてきた指導的な人々のできるだけ多くと提携しようと努力した。この配慮のために、われわれは大いに頭を痛め、多量の紙と手紙と電報と貴重な時間を費やしたが、その結果はほとんど零にひとしかった。社会民主党多数派を手厳しく批判していたもののうちで、人格も信念も腐蝕させる偶像と化した党規律に抗って、ローザ・ルクセンブルクやフランツ・メーリングや私と行動をとともにする勇気をもっていたのは、カール・リーブクネヒトただ一人であった」(フレリヒ 1948=伊藤成彦訳1991: 247による)。

(2) ロシア革命

やがて、第一次世界大戦のなかで1917年のロシア革命が起きた。1917年のロシア革命の経過中、ローザは全期間獄中にあり、クララは、4月に創立されたUSPDの統制委員となり、5月16日、1891年以来編集長を務めたSPDの女性機関紙『グライヒハイト』を追われ、『ライプツィヒ人民新聞』に依拠し、6月29日にその『女性付録』第一号を発行して言論の拠り所とした。

ローザは、1917.4.13付け、ウロンケ監獄からクララへの手紙で「ロシアの事件は測り知れないほどの強大な広がりを持つ事件で、ロシアでこれまでに起こったことは、小さな序曲にすぎないと私は見えています。事態は壮大な展開を示さずにはおかないでしょう。それが必然的な成り行きです。そして全世界に反響を呼び起こすことは必至です」と書き、二月革命を1905-7年のロシア革命の継続、発展と見なし、ドイツ・プロレタリアートのロシア革命に対する重大な責任を自覚した。

1918年秋、ローザはブレスラウの獄中で、ボルシェヴィキの政策に対する総括的な批判を含む「ロシア革命論」を書きはじめた。パウル・フレリヒは、「この草稿は、ドイツ革命が起こったために完成されなかった。パウル・レヴィは、1922年にこの断片を出版した」(フレリヒ 1948=伊藤成彦訳 1991: 287)と書いている。フレリヒは、「草稿」、「断片」であることを強調している¹⁶。

ローザのロシア革命論のすべては、日本語では、伊藤成彦・丸山敬一訳(1985)に収められており、ドイツ語では、Institute für Geschichte der Arbeiterbewegung (1990)が日本語の前書とほぼ同じ構成で収録している。また、前者には、伊藤成彦の「ローザ・ルクセン

¹⁶ フレリヒは、原注でローザのこの草稿は、「伝説につつまれている」と言っている。つまり、レヴィは、その序文で、この草稿は、ヨギヘスによって焼却されようとしたと述べているが、クララによって有力な論拠から反論されている。たしかにレオは、この草稿の公表に反対したが、それは、ローザの意見が本質的な点で変わっていたからであり、彼女自身、ロシア革命について新しい本を書く意向をもっていたからである。と、草稿の行方が当時わからず、レオはその草稿をもっていなかったし、1922年KPDを離れたレヴィ発行のものは、不十分なコピーをもとにしたもので、草稿そのものは1919年の11月革命の期間、ある人に保管され、10年後に発見されて、フェリクス・ヴァイルがレヴィ版に必要な修正と重要な補足を加えて、1928年に、Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung に発表した(フレリヒ 1948=伊藤成彦訳1991: 287-289)というのである。

ブルクとロシア革命」という独立の論文が（以下それらを参照して叙述する。また邦訳は伊藤成彦・丸山敬一訳を使用）、後者には、ラチザ（Laschitza, Annelies）の序文と、パウル・レヴィの「ロシア革命、批判的評価。ローザ・ルクセンブルグの遺稿から」への序文が付されている。

ローザのロシア革命批判点とは、次の点であった。

まず、第一は、土地の国有化を避けたこと（農地改革・農民政策）、第二は、民族自決・講和問題、第三は、憲法制定議会（制憲議会）の解散と選挙法、つまり、普通選挙によって選出される代議体を原則的に否定し、ソヴィエトだけに依拠しようとした選挙法、第四は、民主主義的保障の廃止、すなわち、出版の自由、結社・集会の権利がソヴィエト政府の反対者にすべて停止された点である。

ローザは、「普通選挙、無制限な出版・集会の自由、自由な論争がなければ、あらゆる公的な制度の中の生活は萎え凋み、偽りの生活となり、そこには官僚制だけが唯一の活動的な要素として残る。プロレタリアートの歴史的使命は、権力を握ったときに、ブルジョア民主主義の代りに社会民主主義を創始することであって、あらゆる民主主義を廃棄してしまうことではない。社会主義的民主主義こそは、プロレタリアートの独裁にほかならないのだ。」「危険は、かれらがやむを得ずやったことを価値あるものとし、この宿命的な条件のためにとらざるを得なかった戦術のすべてを今後理論的に固定化し、国際的プロレタリアートに社会主義的戦術の手本として見習うことを勧めようとするところにはじまる。」といい、「問題はロシアでは解決され得なかった。それは国際的にしか解決されない。」と書いていた。

このローザの見解は、1922年の公表以降、その是非をめぐって論争の的となっていたが、ソ連・東欧の崩壊後は、ロシア革命に対するローザの先見の明ある批判として一段と評価されているものである。渦中にあったクララは、当時はたしてどのような態度をとったのであろうか。

伊藤成彦は、伊藤成彦・丸山敬一訳（1985）の『ロシア革命論 ローザ・ルクセンブルク』第Ⅲ部を「ローザ・ルクセンブルクとロシア革命」と題して、次のようにクララの見解に言及している。

パウル・レヴィによる刊行の前からローザの友人であったアドルフ・ワルシャフスキ（ワルスキ）（Warski, Warszawski, Adolf）と、クララは、連名で「パウル・レヴィの背信に対して 説明」という論説を『ローテ・ファーネ』（1921.12.22付け）に掲載し、刊行後アドルフ・ワルスキは、「革命の戦術問題に対するローザ・ルクセンブルクの立場」を、クララ・ツェトキーンは「ロシア革命に対するローザ・ルクセンブルクの立場について」を、ルカーチは「ローザ・ルクセンブルクの『ロシア革命批判』に対する批判的覚え書」を、レーニン「ローザ・ルクセンブルクはその誤りにもかかわらず、やはり驚であったし、今でも驚である」という有名な言葉を残した「政治家の覚え書」を書いた（伊藤成彦 1985: 202, 210参照）。

伊藤成彦によれば、ワルスキとツェトキーンは、ローザ・ルクセンブルクは獄中で十分な情報を得ていなかったためにロシア革命に対して誤った判断を下したが、その後ドイツ革命のなかでその見解を改めてロシア革命に完全に同調した、と主張して、ローザ・ルクセンブルクとレーニンの基本的な一致を強調し、ルカーチは、たとえローザ・ルクセンブルクがドイツ革命のなかでその見解を変えたとしてもローザの思想のなかにはレーニンの思想と基本的に一致しない点があると考えたという。

まず、農民政策については、ロシア革命はあえて「農業政策の革命的合目的性」（ボルシェヴィキと対立したロシアの社会革命党エスエルの政策を採用して革命を成功させる）を政策としてとったのだというのがクララの考えであった。制憲議会の解散、社会主義的民主主義のあり方の問題について、ツェトキーンとワルスキが、ドイツ革命の中でローザが見解を変えたという根拠を、「ローザは、ポリシェヴィキによる制憲議会の解散を批判したが、その後、ドイツ革命の中で、ローザ自身も国民議会制度に反対して『全権力をレーテへ』と主張し、ソヴェトへの権力の一元化を認める立場に立った」ことにおいているが、伊藤成彦は、これには二つの点で重要な事実の誤認があったという。

クララ・ツェトキーンは、「制憲議会、プロレタリア独裁、『民主主義』という問題の論点に関して、ヨギヘスは、ポリシェヴィキの政策を一その強行策をも含めて一歴史的な必然としてとらえて、当時の具体的な状況の中に位置づけていた。疑いもなく、ポリシェヴィキの戦術に対するレオ・ヨギヘスの評価こそが、ローザ・ルクセンブルクにも大きく影響を与えて、彼女に以前の意見を変えさせることになったのである」といっている。つまり、ローザがドイツ革命のなかで『ローテ・ファーネ』に書いた論説「全権力をレーテへ！国民議会反対！」を見解変更の最大の証しとし、「『ローテ・ファーネ』こそは、ローザ・ルクセンブルクの最後の決定的な政治的信条の表明であり、遺書である。それらとロシア革命の中心的経験、中心的スローガンとの間にはいかなる矛盾もない」とクララは書いたが、第一は、ローザの原則的立場と戦術的な次元での対応の問題であり、クララの批判は妥当ではないという点、第二は、クララが、ローザがポリシェヴィキによる制憲議会の解散に反対したというが、ローザの批判は、解散措置に向けられたものではなく、社会主義による民主主義の新しい発展であったというのが、伊藤成彦のクララ批判であった。

私見では、クララはきわめて政治的判断をする人であり、1922年レヴィが公表した段階で、1918年にローザが草稿として書いたものを、1922年の情勢にあわせて解釈して見解をのべているのであり、クララとしては、その時点で1918年のローザの論調にそのまま同意することは不可能であったらうということである。クララは、常に、今何を優先すべきかを考えた人であった。

(3) ドイツ11月革命のなかでのローザとクララ

1918年、ドイツでは、ベルリンの大ストライキに始まり、3月3日、ブレスト・リトウ

スクで露独単独講和条約に調印した。反戦ストライキが広がって、各地に労働者兵士協議会（レーテ）が組織され、11月9日、カイザーの退位、帝政の打倒、SPDのエーベルトを首相として共和制政権をつくり、連合軍に休戦申し入れ、休戦条約が締結された。いわゆるドイツ11月革命である¹⁷。

村瀬（1962: 210）は、「ドイツ革命は三つの方向、即ち1.『外から』の連合国におけるドイツ民主化の要求、2.『上から』の自由主義諸派の国内改革及び妥協平和の要求、3.『下から』のスパルタクス団及び独立社会民主党左派による革命運動によって行われた。そして直接の動機は軍事的崩壊であった」と書いている。

ドイツ革命は、1918年11月8日、ローザをブレスラウの監獄から解放した。ヘルマン・ドゥンカー（Dunker, Hermann 1874.5.24-1960.6.22）によれば、ローザは、11月10日、ベルリンに着いてすぐ、ドイツ革命のなかで『ローテ・ファーネ』発行のためにスパルタクス団が押収した『ロカール・アンツァイガー』編集部（シュエル出版社）に直行した。『ローテ・ファーネ』は、ここで2号まで発行されたが、エーベルトとの力関係でこの場所を放棄して、別の印刷所を見つけ、ローザとカールの編集で11月18日に改めて発行された（ツェトキン他 1971＝栗原訳 1975:37-38）。『ローテ・ファーネ』はローザの死に至るまでの2ヶ月間、ローザの最後の言論活動の砦であった。

パウル・フレリヒはいう。「この当時、ローザ・ルクセンブルクがとった政策と行動についてもっとも信頼できる記述を残しているのは、クララ・ツェトキンである。ツェトキンはその著『ロシア革命にたいするローザルクセンブルクの態度について』で、レオ・ヨギヘスからの手紙にもとづいてつぎのようにのべている。『人々は元気いっぱい希望にみちていたが、しかし、ローザ・ルクセンブルクはこの事件をベルリンだけの立場からみず、運動全体との関連において、とくに全ドイツの広範な人民の政治意識の発展との関連においてとらえていた。したがってエーベルト政府の打倒という要求は、さし当たっては革命的プロレタリアートを結集させるための宣伝スローガンであって、直接、革命闘争をめざしたものではなかった。現状のもとで、ベルリンだけで闘争することは、もっともよくいっても、ベルリン“コミューン”にいたるだけであり、しかもおそらくそれは、パリ・コミューンに比べてずっと小型のものになるであろう。したがって目下の戦闘目的は反革命的攻撃にたいして力の限り防衛することである。つまり、アイヒホルンを復職させ、ベルリンの革命的プロレタリアートを残酷に弾圧するためによびこまれた軍隊を撤退させ、労働者を武装させ、軍事・行政権を革命的プロレタリアートの代表機関に委譲させることである。この要求の貫徹は行動によるべきであって、交渉によるべきではない』（フレリヒ 1948＝伊藤成彦 1991: 347）と。

17 ドイツ11月革命とは1918年11月3日のキール軍港の水兵の反乱に端を発した大衆的蜂起とその帰結としてカイザーの退位、帝政の打倒と議会制民主主義を旨とするヴァイマル共和国の誕生に終わる一連のドイツブルジョワ民主主義革命を指す。

このように当時のローザはベルリンの11月革命を見ていたとクララは後に書いているのである。

この間、クララは、病気でシュツットガルトを離れていないので、ローザと行動をとるにはいなかった。この2ヶ月間のローザとクララの関係を示す資料は、ベルリンのローザからシュツットガルトのクララへの12通の通信（1918年11月18日付2通、21日付、24日付、29日付、30日付、12月21日付、25日付、26日付、日付なし、1919年1月4日付、1月11日付）によってみることができる（Luxemburg, 1984 *Gesammelte Briefe*, Bd. V, 416-427）。

1918年11月14日付（電報と思われる）では、ローザはクララと何とか連絡を取り合おうとしている。クララは病気でベルリンへの旅は無理なので、電報か、速達郵便で連絡を取ろうという簡単なものであった。11月18日、ローザはクララに『ローテ・ファーネ』に署名つきの論文を、テーマは任意で急いでホテル・モルトケに送って欲しいと書いている。自分はベルリンへの汽車を降りてから自宅にも帰っていないこと、『ローテ・ファーネ』にクララの名前がほしいこと、女性に関する内容で書いてもらいたいと催促している。

ローザは、11月21日付でクララの論文落手の電報をうっており、クララがローザの求めに応じて書いた原稿は「革命と女性」と題して『ローテ・ファーネ』1918年11月22日号に掲載された（Zetkin 1918: 55-60）。

11月24日付のローザのクララへの手紙は、落ち着いた手紙である。自分の仮住所は、秘書のマチルデ・ヤコブ宛にしてほしいこと、そして「私はまだ家に帰っていない」と書いている。「女性への宣伝の重要性と緊急性はあなたと同じように私も十分理解される」として、『ライプツィヒ人民新聞』付録のようにベルリンでも何らかの形で女性向け宣伝誌を必要としていることを熱心に書き送り、二人が会う可能性を問い、最後にツンデルに宜しくと結んでいる。

11月29日の手紙も長いものである。内容は『ローテ・ファーネ』の編集に関することであふれているがそのなかで『ローテ・ファーネ』に女性新聞として半分大の用紙で週一回の付録をつけることを決めたのでクララにそれをやるべきだと書いている。11月30日付では、ローザはクララに、「すぐ、革命のなかでの女性の課題について、短く、平易な、宣伝的な一般的な女性向けパンフレットを送ってください」と依頼している。

12月は、20日、25日と26日の3通のクララへの通信が残されている。20日はまた急ぎの短い原稿依頼である。クリスマスの25日、「私は今日、ブレスラウ以来はじめて私の文机に向って、あなたにクリスマスの挨拶を書いています。」という書き出しで、どんなめまぐるしい一日を送っているか、リーブクネヒトと、どんなに危険な毎日を生きているかを書いて、クララのところに行きたいと思っても時間がとれないことを説明している。ベルリンの政治的混雑が目に見えるような手紙である。

12月26日は、クララから23日付の手紙を受け取ったが、私があなたのところに行くな

んで考えられない。私は1日中ローテ・ファーネから離れられない。あなたがこちらに来るかどうかわかる、それはいつかを出来るだけ早く知らせしてほしいという文面となっている。

1919年に入って、1月4日に、「リストから消しておいてください。後文。」という電報を打っている。文集編者の注記に寄れば、リストとは、ヴールテンブルク憲法制定州議会へのUSPDの代議員のリストと思われるとある。しかし、それに続く手紙は載っていない。クララの側からの返信の所在は筆者には今のところわからない。

そして、ついにクララへの最後となる1919年1月11日付の手紙となる。

「今日あなたの詳しい手紙を受け取り、やっと落ち着いて読むときをえました。それに返事を書いているなんて信じられません。数週間来私と、私たちすべてが、どんな生活の仕方をしてることか、雑踏、ひっきりなしの転居、絶え間ない警報の知らせ、その間の緊張した仕事、会議、等々。私は、逐一あなたに書くことはできません！私の住まいを、私は、ただ夜の二・三時間、時々見るだけなのです。でも今日、多分首尾よく手紙を受け取れたのです。私はどこで始めるべきかさえもはっきりわからず、あなたにそんなに言うべきことはありません。

つまり、とくに、選挙を無視するという問題に関連することですね。あなたは、この決議の効果を、すばらしいことだと過大評価しています。『リューレ主義者』はいません、リューレ¹⁸は、会議の『指導者』などではありませんでした。わたしたちの「敗北」は、子どもじみた、不釣合いな、レベルの低い急進主義でした。しかし、それは、まさしく会議の初めだけでした。会議の一層の経過の中で、私たち（中央）と代表委員たちのつながりは打ち立てられました。そして、私が、私の報告で選挙無視の問題に関して、短く再度取り上げている間に、すでにはじめにあったのとは全く異なる共鳴を感じたのです。『スパルタクス主義者』は、大部分、新しい世代であり、『古い信用のおける』党のねばけた伝統から解き放されていることを忘れないでください。そしてそのことは、光と影の側面から捉えられなければならないのです。——【後略】

最後は、「——レオ・ユギヘスは逮捕されました。今日はこれで終わりにしなければなりません」となっている。

(4) クララのローザ追悼

クララは、ロシア革命やドイツ革命、それにローザについていくつかの文献を残すこととなる。どのようなものが挙げられるか列挙する。

Karl Liebknecht und Rosa Luxemburg müssen für die Massen lebendig bleiben (Aus dem Brief an Mathilde Jacob, die Sekretärin Rosa Luxemburgs, 18. Januar 1919)

Rosa Luxemburg und Karl Liebknecht (in: *Leipziger Volkszeitung*, vom 3. Februar, 1919)

IML/ZK/SED hrsg. von Ilse Schiel und Erma Milz (1971) *Karl und Lasa, Erinnerungen*, Dietz Verlag, Berlin. (栗原佑訳 1975 『カールとローザドイツ革命の断章』大月書店に収録)

18 Rühle, Karl Heinrich Otto (1874.10.23-1943.6.24) のこと。

Erklärung (20. Dezember 1921)

Um Rosa Luxemburgs Stellung zur russischen Revolution, 1922.

クララは、ローザへの弔辞のなかで、「社会主義の理念は、ローザ・ルクセンブルクにおいては頭脳と心臓から発した情熱、すべてにまさる強烈な情熱、つきることなく燃えて創造性を発揮する情熱であった。革命を用意し、社会主義への道を開くことが、この稀有な女性の生涯の任務であり、野心であった。革命を体験し、革命をともにたたかうことこそが彼女にとって最高の幸福であった。意志の力、無私、献身—これらを言い表すには、言葉はあまりに弱すぎる—をもって、ローザ・ルクセンブルクはもてるものすべてを社会主義のために投入した。彼女が社会主義のために犠牲に供したものは、彼女の死ばかりでなく、長い年月にわたっての毎日毎時の仕事と闘争、つまり彼女のすべてであった。——彼女は革命の剣であり焰であった。」(フレーリヒ 1948=伊藤成彦邦訳 1991: 228) といっている¹⁹。

『ライブツィヒ人民新聞』1919年2月3日付でクララは、「ローザ・ルクセンブルクとカール・リープクネヒト」と題する追悼文を書いているが、冒頭はハイネの詩で始められている²⁰。その中でローザについて、「『ローテ・ファーネ』は、ローザ・ルクセンブルクその人であった」、「ローザ・ルクセンブルクはまれにみる意志の人であった。きびしい自制心が、彼女の本質の燃え上がる炎を内面にかくし、外目には、沈着冷静のおおいの陰に押し込めた。自分自身を制することによって、彼女は他の人たちを教育し指導することができた」、「彼女の友情は誠実、献身、自己犠牲、やさしい配慮そのものであった」、「小柄で病身ながらローザは類ないエネルギーの権化であった。彼女はどの瞬間にも自分自身にたいして最高のものを要求し、それを受け取った」、「謀殺された人のための哀悼は告発となる」、「残虐にも殺された者の血潮がエーベルト、シャイデマン、ノスケらの魂にこびりついている」、「彼らはカール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクの謀殺にいきつくほかない雰囲気のみずからつくりだし、またひとにつくりださせたのだ」、「謀殺された者たちは死んではいない。彼らの心臓は歴史の中で鼓動し続ける」(IML 1971=栗原訳 1991: 261-268) と書いている。

おわりに

クララ・ツェトキーンのその後の生き方には、多分にローザの遺志を継ぐ部分があったらう。KPDは、その後、多難な道をたどった。表中に1923年以降を省略したが、その後、1933年に没するまで、「日常闘争に身を献げ、これが仆れた僚友が自分に課した義

¹⁹ クリフ 1959=浜田訳 1961: 163-164も同じ箇所を引用している。筆者は原文を確認していない。

²⁰ わたしは剣だ。わたしは炎だ。／暗闇の中で君たちを照らしたのはこのわたしだ。／戦いがはじまると、わたしは／まっ先に立って、最前列で戦った……／われわれには悲嘆にくれる暇はない。／新たにラッパの音が鳴りわたる。／さあ、新しい戦いのときだ— ハインリヒ・ハイネ。

務に答える道だ、とくりかえし」(フレーリヒ 1948=伊藤成彦訳 1991: ii) ながら、レーニンを送り、ツンデルと離別し、KIの方針の展開にもまれ、スターリンと争い、長男マクシムの前妻ハンナとその息子ヴォルフガングの経済的心配をしながら(伊藤 2007a)最後まで執筆活動の手を休めなかった。

ローザとの関係で興味深いことは、ローザは、ドイツ革命のなかで、女性を引き付けるために、クララに女性に関する原稿を多く依頼していたという事実である。ローザは、ほとんど女性問題について論じることはなかったが、人口の半分をしめる女性を味方にして参加させることなしに社会変革はあり得ないことを十分に認識し、その役割をクララに委ねていたことが証明される。またクララは、ロシア革命やドイツ革命のなかで、どんな問題も女性の問題として、女性に引き付けた論稿を次々に発表していることも改めて確認された。

ローザは、自らの死後、数ヵ月後にヨギヘスが殺されたこと、1922年にレヴィが「ロシア革命論」を公表し、論議を呼びおこし、複雑な状況のなかで1930年に自殺したこと、コスチャが、カナダで1980年まで生きながらえたことを知らない。何よりも、クララが、KIの執行委員になって、激動のロシアで没したこと、ヒトラーの台頭や、社会主義が一筋縄ではいかない紆余曲折をたどり、現在に行きついて「ロシア革命論」の再評価が起きていることも知る由も無かった。

本研究は、平成17-20年度の科学研究費補助金(C)(課題番号 17510224)の一部として行われている。

引用文献(著者名アルファベット順)

- Badia, Gilbert (1993=Florence Hervé und Ingebourg Nodinger 1994) *Clara Zetkin, Eine neue Biographie*, Dietz Verlag Berlin GmbH. (原書は Badia, Gilbert (1993) *Clara Zetkin, féministe sans frontières*, Les Editions Ouvrières, Paris.)
- クリフ, トニー (1959=浜田泰三訳 1961) 『ローザ・ルクセンブルク』現代新書12, 現代思潮社, 東京.
- Dornemann, Luise (1957) *Clara Zetkin, Leben und Wirken*, Dietz Verlag, Berlin. (邦訳: 1957年版=武井武夫訳: 1969) 『解放運動の母, クララ・ツェトキンの生涯』新日本出版社) 東京, この伝記の原書は, *Clara Zetkin, Leben und Wirken*, (5., völlig neu erarbeitete und ergänzte Auflage) として1953年に改定され, その後も版を重ねた.
- Dörnenburg, Manuella (1997) *Clara Zetkin, Eine Annäherung*, Edition Korona, Birkenweder.
- フレヒトハイム, オシップ. K. (1948=足利末男邦訳1971) 『ヴァイマル時代のドイツ共産党』東邦出版, 東京.
- Frölich, Paul (1927) Clara Zetkin, in: *Alles für die Revolution! Aus Leben und Werk der Kämpferin Clara Zetkin*, Vereinigung Internationaler VerlagsAnstalten, Berlin, 3-17.
- フレーリヒ, パウル (1948=伊藤成彦邦訳 1991) 『ローザ・ルクセンブルク—その思想と生涯』御茶の水書房, 東京.
- Henicke, Hertmut (2008) Clara Zetkin: „Um Roza Luxemburgs Stellung zur russischen revolution“, Theoretisch-methodische Anmerkungen, in: Plener, Ulla (Hrsg.) *Clara Zetkin in ihrer Zeit, Neue Fakten*,

- Erkenntnisse, Wertungen*, Roza-Luxemburg-Stiftung, Reihe: Manuskripte, 76, Karl Dietz Verlag, Berlin, 86-104.
- Honeycut, Karen (1975) *Clara Zetkin, A Left-Wing Socialist and Feminist in Wilhelminian Germany*, Diss. Columbia University.
- Hetmann, Frederik (1976) *Rosa L. Die Geschichte der Roza Luxemburg und ihrer Zeit*, Beltz Verlag, Weinheim und Basel.
- IML/ZK/SED, Hrsg. von Ilse Schiel und Erma Milz (1971) *Karl und Lasa, Erinnerungen*, Dietz Verlag, Berlin. (邦訳: 栗原佑 1975『カールとローザ—ドイツ革命の断章』大月書店, 東京)
- 伊藤成彦 (1985)「ローザ・ルクセンブルクとロシア革命」伊藤成彦・丸山敬一訳 (1985)『ロシア革命論 ローザ・ルクセンブルク』論争社, 東京.
- 伊藤成彦・丸山敬一訳 (1985)『ロシア革命論 ローザ・ルクセンブルク』論争社, 東京.
- 伊藤成彦 (1991)『ローザ・ルクセンブルクの世界』社会評論社, 東京.
- 伊藤セツ (1984)『クララ・ツェトキーンの婦人解放論』有斐閣, 東京.
- 伊藤セツ (2007a)「クララ・ツェトキーン晩年の私的生活の一断面—ドイツ連邦文書館 SAPMOに残された孫ヴォルフガングへの手紙を通じて—」『学苑』No.797, (2)-(19).
- 伊藤セツ (2007b)「クララ・ツェトキーンと次男コスタチャ&ナジャ・ツェトキーン夫妻との文通」『学苑』No.802, (33)-(46).
- Institute für Geschichte der Arbeiterbewegung (1990) *Rosa Luxemburg und die Freiheit der Andersdenkenden*, Diets Verlag, Berlin.
- カウツキー, ルイーゼ編, 川口浩・松井圭子訳 (1983)『ローザ・ルクセンブルクの手紙—カールおよびルイーゼ・カウツキー宛— (1869-1918)』岩波書店, 東京.
- Luxemburg, Rosa (I, II, III, 1982, IV, 1983, V, 1984) *Gesammelte Briefe*, Hrsg. von IML beim ZK der SED, 5Bde., Berlin.
- ルクセンブルク, ローザ, 北郷隆五訳, 大内兵衛解説 (1952)『ローザ・ルクセンブルクの手紙—ゾフィー・リープクネヒトへ—』青木書店, 東京.
- ルクセンブルク, ローザ, 伊藤成彦訳 (1991)『友への手紙』論創社, 東京.
- ルクセンブルク, ローザ, 伊藤成彦・丸山敬一訳 (1985)『ロシア革命論』論創社, 東京.
- マイネッケ (1946=矢田俊隆訳 1974)『ドイツの悲劇』中央公論社, 東京.
- Müller, Eckhard (2008) *Clara Zetkin und die Internationale Frauenkonferenz im März 1915 in Bern*, in: Plener, Ulla (Hrsg.) *Clara Zetkin in jhrer Zeit, Neue Fakten, Erkenntnisse, Wertungen*, Roza-Luxemburg-Stiftung, Reihe: Manuskripte, 76, Karl Dietz Verlag, Berlin, 54-71.
- 村瀬興雄 (1954, 1962増補5版)『ドイツ現代史』東京大学出版会, 東京.
- 西川正雄 (1989)『第一次世界大戦と社会主義者たち』岩波書店, 東京.
- 西川正雄 (2007)『社会主義インターナショナルの群像 1914-1923』岩波書店, 東京.
- 野村修編 (1972)『ドキュメント現代史 2 ドイツ革命』平凡社, 東京.
- Puschnerat, Tânia (2003) *Clara Zetkin, Bürgerlichkeit und Marxismus, Eine Biographie*, Klartext, Essen.
- ローゼンベルク, アルトゥール (1928=足利末男訳 1969)『ヴァイマル共和国成立史 1871-1918』みすず書房, 東京.
- 篠原一 (1956)『ドイツ革命史序説』岩波書店, 東京.
- 篠塚敏生 (2008)『ヴァイマル共和国初期のドイツ共産党—中部ドイツでの1921年「3月行動」の研究』多賀出版, 東京.
- 田村雲供・生田あい編 (1994)『私たちのローザ・ルクセンブルク—フェミニズムと社会主義』社会評論社, 東京.

- 寺崎あき子 (1994) 「女の目で読みとくローザ・ルクセンブルク 性・民族・階級を考える手がかりとして」 田村雲供・生田あい編 (1994: 19-42).
- Weber, Hermann/Herbst, Andreas (2004: 508-509) *Deutsche Kommunisten-Biographisches Handbuch 1918 bis 1914*, Dietz Verlag, Berlin.
- Zetkin, Clara (1918) *Die Revolution und die Frauen*, in: Clara Zetkin (1960) *Ausgewählte Reden und Schriften*, Band II, Dietz Verlag, Berlin.
- Zetkin, Clara (1919) *Einleitung zu Roza Luxemburg; Die Krise der Sozialdemokratie*. Reipzig,
- Zetkin, Clara (1919) *Karl Liebknecht und Rosa Luxemburg müssen für die Massen lebendig bleiben (Aus dem Brief an Mathilde Jacob, die Sekretärin Rosa Luxemburgs, 18, Januar 1919)*, in: Clara Zetkin (1960) *Ausgewählte Reden und Schriften*, Band II, Dietz Verlag, Berlin.
- Zetkin, Clara (1919) *Rosa Luxemburg und Karl Liebknecht (in: Leipziger Volkszeitung, vom 3. Februar, 1919)*, in: Clara Zetkin (1960) *Ausgewählte Reden und Schriften*, Band II, Dietz Verlag, Berlin.
- Zetkin, Clara (1921) *Erklärung (20. Dezember 1921)*, in: Clara Zetkin (1960) *Ausgewählte Reden und Schriften*, Band II, Dietz Verlag, Berlin.
- Zetkin, Clara (1922) *Um Rosa Luxemburgs Stellung zur russischen Revolution*, in: Clara Zetkin (1960) *Ausgewählte Reden und Schriften*, Band II, Dietz Verlag, Berlin.

(いとう せつ 大学院生活機構研究科生活機構学専攻教授)

